

タイトルにある「多岐的建築」とはある一つの建築を一律に捉えさせるのではなく、様々な個別解を導くような建築のことを言います。大量生産から画一的に製品を作り出した、つまりは全体解を求めた 20 世紀が終わりに、今日ではその反動で様々な個別解を生み出す試みが行われています。そんな中建築のようにその持つ大きさと、そのある土地から逃れられないものがいかにして様々な個別解を単体で、導きだすかという事を考え、「多岐的建築」というものを思考しました。

多岐的建築とは



この場合、下の白色の丸が多岐的建築ということになります。



戦後のオランダの建築家アルド・ファン・アイクは彼の代表作「子供の家」がかなりの大きさを持ちながら、全部で 125 人の孤児院の子供一人一人が、その建築を自分の家のように思う事が出来るような空間構造を説きました。本計画研究は 2 パートに分かれており、研究部分では「子供の家」が「多岐的建築」であるという仮定のもと、「子供の家」と当時の彼の言説を通して、彼の設計理念、設計姿勢を学び、計画部分ではそれをもとに自分の「多岐的建築」を計画しようというものです。

Aldo van Eyck 略年表



ファン・アイクは「子供の家」竣工前後の 1 年間に、自身も編集委員をつとめていたオランダの建築雑誌 Forum にそれまでの CIAM との決別宣言ととれる論考「The story of another idea」を掲載し、その 3 ヶ月後の CIAM 第 10 回 Otterlo 会議にて自身の理念を「われわれにより、われわれのために」と題して発表し、その発表の中でその理念の明確な建築表現として「子供の家」を解説しています。

研究部分では雑誌 Forum での論考「The story of another idea」と、CIAM 第 10 回 Otterlo 会議での彼の発表から彼の理念と近代建築への批評態度を、「子供の家」の彼の解説と、その形態分析から前述の理念の形状化、そしてその先の建築への試みを実際の手法として浮かび上がらせることを目的としています。

1959年6月 論文 p4~10

Forum no.7 first issue 「The story of another idea」

雑誌 Forum はファン・アイク自身も編集委員に入っていたオランダの建築雑誌で、その第 7 号の巻頭として彼の論考「The story of another idea」が発表されました。

その中で彼は戦後のオランダの画一的な都市計画に非常な嫌悪を示し、また戦前の CIAM の提唱した機能主義に対してその批判を述べています。

それは、「感傷に満ち、アイデンティティを保証された環境という意図の離れ物によって人間が想像しえたはずの物を今では創造する事が出来なくなってしまうのは何故か、と人は自問する。」という部分にあるように、人間の意図により構築するという作用を奪う物であった画一的な計画に対する批判だったのではないのでしょうか。

この「The story of another idea」の掲載された Forum no.7 は CIAM Otterlo 会議でも参加者全員に配られる等、ファン・アイクと彼の周りの当時の思想を知る上で非常に重要なものであったと考えられます。その戦前の

CIAM がとったアプローチを人間を除外した抽象性として批判し、その超克の試みの思考が Otterlo 会議での彼の発表、そして実作としての「子供の家」に繋がっていきます。



2006年11月 CIAM 10 in Otterlo

dual phenomenon / 対現象 論文 p23~

彼の思想を理解するうえで非常に重要な言葉「対現象」に彼は Otterlo 会議の中で何度も触れています。対現象とは、「対なることが同時に起きているという現象」で、彼はその言葉を子供の家の構成の中にも組み込んでいます。

「家为本場の家となりたければ、家は小さな都市でなければならず、都市が本当の都市でありたければ、都市は大きな家でなければならない。」これが彼の「対現象」という言葉を最も分かりやすく説明してくれる言葉です。

「Otterlo drda」への考察 論文 p19~

「対現象」という言葉を使いながら、彼は自身の理念の説明に「Otterlo drda」という図式を使用しそれを使い理念を整理して伝えていきます。左の円は建築を表し、右の円は人間を表し、その二つの円の上に「par nous, pour nous (われわれのわれわれのために)」とし、彼の思考した建築



の目的の明確な図式化を行っています。

その二つの円を包むような大きな円形に集めて建築と人間が融解するのはいつかと同じ、そしてその融解のためには、クアトロフォンターネの形態ではなくその本質を、二つの環の間に加える事が必須だと問います。

クアトロフォンターネは「エンチャーリの言葉を借りるまでもなく様々な「2重性」を、ファン・アイクの言葉を借りるなら「対現象」をその中に見出される建築です。「形態ではなく、その本質を」という部分からも類推されるに、そこに見られる 2 重現象の重層性を 2 つの環の融解に必要だと説きます。近代建築の還元性を批判してきた彼の、還元性を防げる条件として対現象の重層性は構築され、そしてこのすぐ後に解説した建築で実現しようとしていた事なのではないのかと推測されます。つまり「子供の家」で実現しようとしていた事なのではないのかと推測されます。



子供の家には、社会から疎外され、ねじ曲げられた子供達が連れてこられます。そんな社会に見捨てられた子供達が、子供の家を本当に「家」として認識する事がこの孤児院には求められていました。それは、戦前のCIAMが主導した機能主義的な建築の作り方では脱える事は難しく、子供達がそれぞれに子供の家を解釈し、自分の家とまで思うようなまさに「多岐的な建築」が求められていたと言える。そしてそれをいかに可能にするかは、先の章で述べた「対現象の重層性」による還元性の助けと言う条件が必要だったのではないかと推測されます。



子供が自分で空間を認知してそこを自分の場所だと思ふ個々を最も求められていた空間が、子供達が住む区域のブレイルームで、そこは子供の家の院長が、彼が前に運営していた孤児院のブレイルームに見られたような、子供がそこら辺でテントを張って、そこを自分の場所だと認識する様な空間性を求めていた事からも明らかです。そしてそのブレイルームに関してはスケッチが残っており、そのスケッチとともに残っていた記述にはそのブレイルームに見られる最小単位「house」に様々なボキャブラリーが重層していき、対現象をその周りに重層して纏っていく様を読み取る事が出来ます。

また、ここで気づかれるのは「House」と子供の家 children's home の関係性です、「House」は子供が1人になり他の孤児院の子供と対面する場で、home は子供の家の住人の子供達が彼らをおねじ曲げた社会に対面する場と解釈する事が出来るのではないのでしょうか。house と home は個人と集団という「対現象」の形をとっていると言う事になる。

後に彼は forum で子供の家に部分と全体に対現象をかけている事に言及している。



それは「都市は大きな家であり、家は小さな都市である」と言う彼が子供の家にかけて個人と集団の対現象について論じた物で、その事から彼が部分と全体を同じ関係性で構築しようとした事が伺えます。

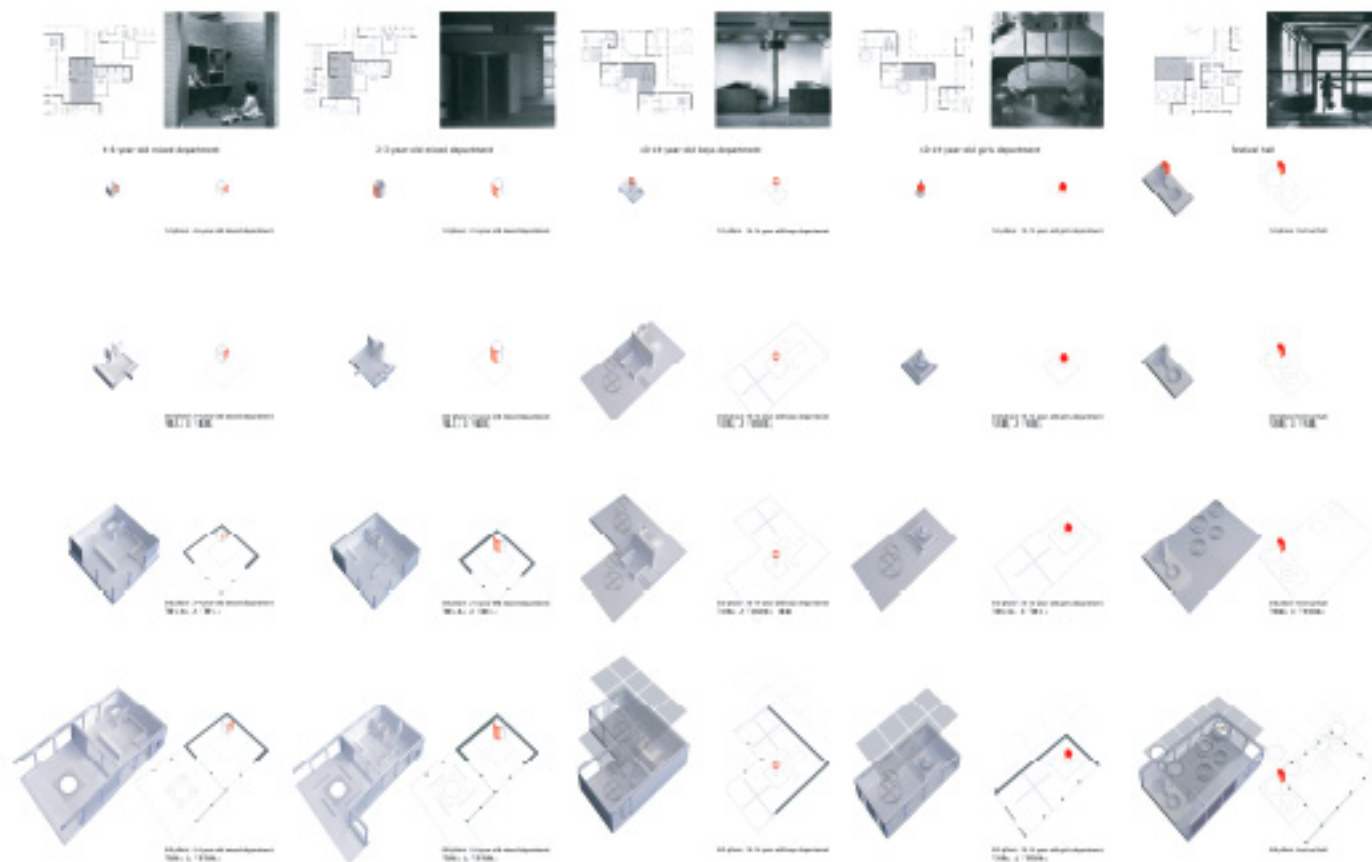
部分と全体が同値であるという事は各ブレイルームに見られる「house」にそこが1人のための「House」であると言う事を示すような特異なデザインが与えられている事と、全体像としての「Home」に集合を思わせるような特異な屋根のデザインが施されている事等からも明らかである。

そして、ブレイルームに顕著に見られるような「対現象」の重層性がその間を等価に繋いでいるという事が真ならば、子供の家はあらゆる人間の集合を包括する、先述した「attelo circle」の2つの環を繋ぐ「われわれにより、われわれのために」の、自分の言葉を使うならば「多岐的な建築」といえるのでは無いでしょうか。

下記は、ブレイルームに見られる「House」からの対現象の重層を4段階にかけてもでるかしたのになります。

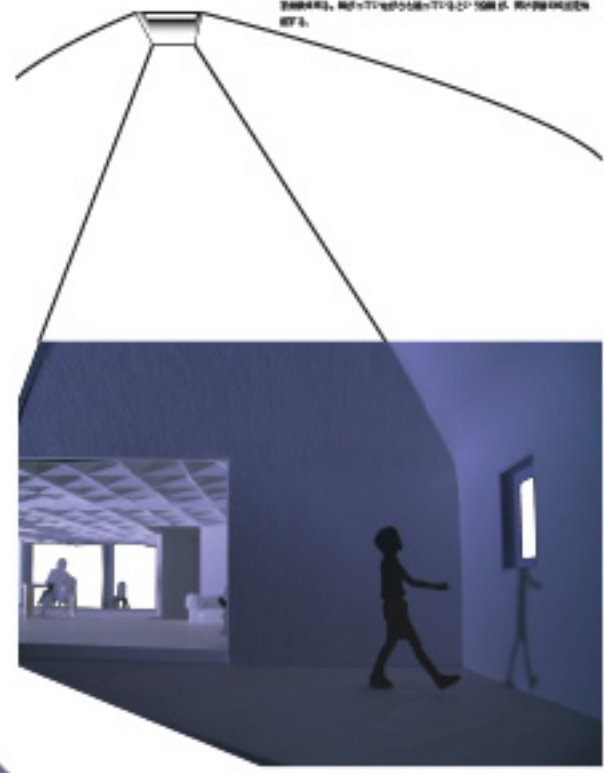
赤い部分が最小単位「House」になります。

子供の家の各ブレイルームに見られる対現象の重層の形態分析





ROOM 01 Living 透視圖
圖中展示了 ROOM 01 的透視圖，展示了其獨特的幾何結構和空間感。圖中可以看到一個人在行走，強調了空間的尺度和比例。



ROOM 02 Living 透視圖
圖中展示了 ROOM 02 的透視圖，展示了其獨特的幾何結構和空間感。圖中可以看到一個人在行走，強調了空間的尺度和比例。

